

続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋の アイヌ語地名

第4回

○オタクシユベウシナイ

「オタクシユベウシナイ」は、中庶路日の出地区の南で西側から庶路川に流れ込んでいる川の名前です。「オ（川尻）・タク（玉石）・スプ（激流）・ウシ（ある）・ナイ（沢）」という意味があり、「川尻に玉石があつて流れが速い沢」と訳されています。道東地区で営林署勤務経験を持つ加藤正信氏は、著書の『道東地方のアイヌ語地名』で、この川の記事に営林署図にある名前として「イランクミルエナイ」を載せ、二つの名前があることを記しています。白糠地名研究会も「イランクミルエナイ」を営林署図の地名として紹介していて、その説明をもとに地図を見ると、加藤氏が記したように「オタクシユベウシナイ」であることがわかります。

■イランクミルエナイ

「イランクミルエナイ」は、「イ（クマ）・ル（道）・アン（ある）・ク（弓）・ミレ（身につける）・ナイ（沢）」という意味で「クマの出る道で弓を身につけておる沢」と訳されます。クマの道について、根本與三郎氏は「クマは、ルーチシ（峠道、山越え、山越えの近道）と言って、近道をする場所があり、その付近には案内標のように、樹皮に爪で印をつけてある。それを実際に自分の目で見たら、積雪の上に立つて印をつけてあった。そして、その地点からそれ程行かない所でクマが何頭も川を渡っていたのを見た。」という話を遺しています。

【参考】『アイヌ民族技術調査Ⅰ（狩猟技術）』北海道教育委員会、2009年

○ケトンチコタン

「ケトンチコタン」は、「ケトンチ（皮張棒）・コタン（村）」という意味で、「クマやシカなどの獣皮を木枠に張ってかわかしている村」と訳され、旧本岐炭鉱付近のケトンチ川東側にあったと考えられています。ケトンチ川は、旧本岐炭鉱の南側を西から流れ、南東へ向きを変えてオタクシユベウシナイに合流する川です。

■ケトンチ「皮張棒」

「ケトンチ」の「皮張棒」という訳は、言語学者の知里真志保博士によるもので、ケト（皮張棒）を組み合わせた棒のことを言い、「ケトウンチセ（皮張棒・ついでに・家）」の「セ」が略されている。

この形になったとのこと。そして「生皮を張った棒を両方から屋根のように寄せかけてその下で火を焚いて乾すようにしたもの」と説明しています。

クマやシカなどの動物は大切な食糧で、皮は、木綿が手に入るまで、植物の繊維とともに、古くから衣服（獣皮衣）や靴などの素材に用いられていたことがわかっています。また、和人との交易品として、熊の胆や鹿角、干し鮭、昆布と同じくたいへん貴重なものもありました。

【参考】『知里真志保著作集3 生活誌・民族学偏「地名アイヌ語小辞典」』、『アイヌの歴史と文化Ⅱ』「アイヌの衣服」児玉マリ

